

# A1 国語

(五〇分)

答はすべて

解答用紙

に書き入れること。

※ 字数の指定のある問題は、テン・マル・カッコなどの記号も一字として答えなさい。  
 ※ 答えは、すべて解答用紙のワクの中におさまるように書きなさい。

一 次の文章はある小説の一部です。これを読んで、後の問に答えなさい。

嘘は私もしじゅうついていた。小学二年か三年のひな祭りのとき学校の先生に、うちの人が今日はひなさまを飾るのだから早く帰れと言っている、と嘘をついて授業を一時間も受けずに帰宅し、家の人には、きょうは桃の卵を愛した。雀の卵は蔵の屋根瓦をはぐと、いつでもたくさん手にいれられたが、さくらどりの卵やからすの卵などは私の屋根に転がってなかったのだ。その燃えるような緑の卵やおかしい斑点のある卵を、私は学校の生徒たちからもらった。そのかわり私はその生徒たちに私の蔵書を五冊十冊とまとめて与えるのである。集めた卵は綿でくるんで机の引き出しにいっぱいしまっておいた。すぐの兄は、私のその秘密の取引に感づいたらしく、ある晩、私に西洋の童話集ともう一冊なんの本だか忘れたが、その二つを貸してくれと言った。私は兄の意地悪さを憎んだ。私はその両方の本とも卵に投資してしまっていたのであった。兄は私がないと言えばその本の行先を追及するつもりなのだ。私は、きつとあつたはずだから捜してみる、と答えた。私は、私の部屋はもちろん、家中いっぱいランプをさげて捜して歩いた。兄は私についてあるきながら、ないのだろう、と言って笑っていた。私は、ある、と頑強に言い張った。台所の戸棚の上によじのぼってまで捜した。兄はしまいに、もういい、と言った。

学校で作る私の綴方も、ことごとく出鱈目であったと言っていた。私は私自身を神妙ない子にして綴るよう努力した。そうすれば、いつも皆にかっさいされるのである。剽窃さえした。当時傑作として先生たちに言いはやされた「弟の影絵」というのは、なにか少年雑誌の一等当選作だったのを私がそっくり盗んだものである。先生は私にそれを毛筆で清書させ、展覧会に出させた。あとで本好きのひとりの生徒にそれを発見され、私はその生徒の死ぬことを祈った。やはりそのころ「秋の夜」というのも皆の先生にほめられたが、それは、私が勉強して頭が痛くなったから縁側へ出て庭を見渡した、月のいい夜で池には鯉や金魚がたくさん遊んでいた、私はその庭の静かな景色を夢中で眺めていたが、隣部屋から母たちの笑い声がどつと起こったので、はっと気がついたら私の頭痛がなおっていた、という小品文であった。この中には真実がひとつもないのだ。庭の描写は、たしか姉たちの作文帳から抜き取ったものであったし、だいたい私は頭のいたくなるほど勉強した覚えなどさっぱりないのである。私は学校が嫌い、したがって学校の本など勉強したことは一回もなかった。娯楽本ばかり読んでいたのである。うちの人は私が本さえ読んでいれば、それを勉強だと思っていた。

しかし私が綴方へ真実を書き込むと必ずよくない結果が起こったのである。父母が私を愛してくれないという不平を書き綴ったときには、受持訓導(担任の先生)に教員室へ呼ばれて叱られた。「もし戦争が起こったなら」という題を与えられて、地震雷火事親爺、それ以上に怖い戦争が起こったならまず山の中へでも逃げ込もう、逃げるついでに先生をも誘おう、先生も人間、僕も人間、いくさの怖いのは同じであろう、と書いた。この時には校長と次席訓導(教頭先生)とが二人がかりで私を調べた。どういう気持ちでこれを書いたか、と聞かれたので、私はただ面白半分に書きました、といい加減なごまかしを言った。次席訓導は手帖へ、「好奇心」と書き込んだ。それから私と次席訓導とが少し議論を始めた。先生も人間、僕も人間、と書いてあるが人間というものは皆おな

## A2 国語

じものか、と彼は尋ねた。そう思う、と私はもじもじしながら答えた。私はいったいに口が重い方であった。それでは僕とこの校長先生とは同じ人間でありながら、どうして給料がちがうのだ、と彼に問われて私はしばらく考えた。そして、それは仕事がちがうからでないか、と答えた。鉄縁の眼鏡をかけ、顔の細い次席訓導は私の言葉をすぐ手帖に書きとった。私はかねてからこの先生に好意を持っていた。それから彼は私にこんな質問をした。君のお父さんと僕たちとは同じ人間か。私は困って何とも答えなかった。

私の父は非常に忙しい人で、うちにいることがあまりなかった。うちにいっても子供らと一緒にはいなかった。私はこの父を恐れていた。父の万年筆をほしがっていながらそれを言い出せないで、ひとり色々と思悩んだ末、ある晩に床の中で眼をつぶったまま寝言のふりして、まんねんひつ、まんねんひつ、と隣部屋で客と対談中の父へ低く呼びかけた事があつたけれど、もちろんそれは父の耳にも心にもはいらなかったらしい。私と弟とが米俵のぎっしり積まれたひろい米蔵に入つて面白く遊んでいると、父が入口に立ちただかつて、坊主、出る、出る、と叱った。光を背から受けているので父の大きい姿がまっくらに見えた。私は、あの時の恐怖を惟うと今でもいやな気がする。

(太宰治「思い出」より)

問一  X に入る漢字二字の言葉を答えなさい。

問二 — 1 「私は兄の意地悪さを憎んだ」とありますが、「私」はなぜ「兄」のことを「意地悪」と感じたのですか。説明しなさい。

問三 — 2 「綴方」と同じ意味の漢字二字の言葉を本文中から抜き出さなさい。

問四 — 3 「剽窃さえた」とありますが、

- (1) この「さえ」と — 5 の「さえ」は意味が異なります。それぞれひらがな二字の言葉で言いかえなさい。  
 (2) 「剽窃する」のここでの意味を、この後に書かれていることをヒントにして答えなさい。

問五 — 4 『秋の夜』というのも皆の先生にほめられた」とありますが、「秋の夜」に書かれている内容のどのような点を先生たちが評価したと「私」は思ったのでしょうか。説明しなさい。

問六 — 6 「しかし」とありますが、この言葉は、どんなこととどんなことを逆であるとしてつないでいますか。「しかし」の前と後のことがらをそれぞれ二〇字以内で説明しなさい。

問七 — 7 「僕とこの校長先生とは同じ人間でありながら、どうして給料がちがうのだ、と彼に問われて」とありますが、(1) 「彼」は、「私」に何と答えさせたかたののでしょうか。十五字以内で答えなさい。

- (2) 「彼」は、そう答えさせることで、「もし戦争が起つたなら」という「私」の綴方の内容に対して、何と言いたかったのでしょうか。説明しなさい。

## A3 国語

## 二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「歴史に『もしも』はない」というのはよく口にされる言葉です。

たしかに、「起きなかったこと」は起きなかったことです。しかし、「起きなかったこと」なんか考えてもしかたがないのかも知れません。

でも、どうして「あること」が起きて、「そうではないこと」は起きなかったのか。その理由について考えるのはなかなかたいせつな知性の訓練ではないかと私は思っています。

どうしてかという点、過去の「起こってもよかつたこと」について想像するときを使う脳の部位は、未来の「起こるかもしれないこと」を想像するときを使う部位とたぶん同じ場所のような気がするから（解剖学的にはどうか知りませんが）。

歴史の勉強をすると、「出来事Aがあつたために、出来事Bがその後起きた」というふうに書いてあります。歴史的事件はまるで因果関係に基づいて整然と配列されているかのようです。けれども、ほんとうにそうなのでしようか。というのは、私たちの世界で今起きている出来事の多くは「そんなことがまさか現実になるとは思いもしなかつたこと」だからです。

例えば、第二次世界大戦が始まる前に、ヨーロッパはいずれフランスとドイツを中心とした国家連合体になり、パスポートも国ごとの通貨もなくなるだろうと予測していた人はほとんど存在しませんでした。同じように、太平洋戦争が始まった頃に日米の緊密な同盟関係が戦後の日本外交の基軸になると予見していた人もほとんど存在しませんでした。

でも、「そういうこと」がいったん現実になってしまうと、みんな「そういうこと」が起こるのは必然的であつたというようなことを言います。

でも、歴史上のどんな大きな事件でも、それを事前に予見できた人はいつでもほとんどいません。

同じことが未来についても言えるだろうと私は思います。

私たちの前に広がる未来がこれからどうなるか、正直言って、私にはぜんぜん予測ができません。わかっているのは「あらかじめ決められていた通りのことが起こる」ということは絶対にないということだけです。後になつてから「きつとこうなると私ははじめからわかっていた」と言う人がいても（たくさんいますが）、私はそんな人の話は信じません。

未来はつねに未決定です。

今、この瞬間も未決定なままです。

一人の人間の、なにげない行為が巨大な変動のきっかけとなり、それによって民族や大陸の運命さえも変わつてしまう。そういうことがあります。歴史はそう教えています。誰がその人なのか、どのような行為がその行為なのか。それはまだ私たちにはわかりません。ということは、その誰かは「私」かも知れないし、「あなた」かも知れないということです。

過去に起きたかもしれないことを想像することはたいせつだと私は最初に書きました。それは、今この瞬間に、

# A4 国語

私たちの前に広がる未来について想像するときと、知性の使い方が同じだからです。

歴史に「もしも」を導入するというのは、単にSF的想像力を暴走させてみせるということではありません(それはそれで楽しいことですが)。それよりはむしろ、一人の人間が世界の運行にどれくらい関与よすることができるのかについて考えることです。

私たちひとりひとりの、ごく小さな選択たくが、実は重大な社会的変化を引き起こす引き金となり、未来の社会のありかたに決定的な影響えいきょうを及ぼおよすかもしれない、その可能性について深く考えることです。もしかするとほかならぬこの自分が起点になって歴史は誰も予測できなかったような劇的な転換かんを遂とげるかもしれない。

そういう想像をすることはとてもたいせつです。

何より、「私ひとりががんばって善いことをしても、何が変わるわけでもない」とか「私ひとりがこつそり悪いことをしても、何が変わるわけでもない」というふうに分の歴史への参与を低く見積もって、なぜやりになっている人に比べて、今この瞬間においてはるかに人生が充実じゅうじつしているとは思いませんか。

(内田樹「もしも歴史が」より)

問一 —— 「なかなかたいせつな知性の訓練ではないかと私は思っています」とありますが、筆者がそう考える理由を、本文全体をふまえ、一〇〇字以内で説明しなさい。

問二 「自分の歴史への参与を低く見積もって、なぜやりになっている人に比べて、今この瞬間においてはるかに人生が充実しているとは思いませんか」と筆者は文章を結んでいます。 「自分」と「歴史」と「人生の充実」の関係について、この文章と異なる考え方もいくつか成り立ちます。そのひとつを自分なりに考えて述べなさい。

### 三 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

「ありがとうございます」という言い方がありますが、これは、「ありがたい」という言葉に「びびります」をつけて、ていねいな言い回しに言いかえたものです。

問一 次の1～5は、「ありがたい」と同じ仲間の言葉です。「ありがとうございます」にならって、それぞれ「びびります」をつけた言い回しにしなさい。

- 1 めでたい
- 2 せこい
- 3 さむい
- 4 やばい
- 5 おおきい

問二 問一の答えの中で、言葉のきまりとしては正しいのに、実際の会話で使うには、ふさわしくないものがあります。それはどれですか。すべて番号で答えなさい。

問三 それはなぜふさわしくないのでしょうか。理由を考えて説明しなさい。